

探索と俯瞰

— 都市に記憶の軌跡を編み込む —

22019028 晝岡 美優
指導教員 宮 晶子 教授

認知地図	境界	ランドマーク
街路	記憶	俯瞰的

1. 制作の背景と目的

緑石を友達と歩いた道、田んぼが広がっていた風景、車通りが多く注意深く渡っていた交差点、子供の頃の道の記憶は思い出と共に鮮明に残っている。一方で大人になり GPS が発達した現在、自分の位置がはっきりしない地に足がついていないような状態で体だけが目的地へ向かっていく。建物の中であっても今までの経験から空間を予測したり、フロアマップを見たりすることで、建物の全体像を俯瞰的に捉えてしまう。廊下や道は、ただ部屋から部屋へ、建物から建物へと移動するための手段に過ぎなくなってしまった。

そんな中、谷中の高低差が多く曲がりくねった街路を歩いた時、子供の頃の歩く楽しさを久しぶりに感じる事ができた。しかし、その一方で複雑な街路を俯瞰的に捉えることが難しく、自分の進行方向や道同士の間隔を捉えることができなかった。大人の俯瞰的な視点も、空間を理解するには重要なことだと感じた。

本制作では、認知地図や街路、大人と子供の空間認識の分析を通じて、身体的経験から脳内地図を描くことで自己の存在を感じられるような建築を提案する。

2. ウェイファインディング

ウェイファインディングとは空間把握能力を使って目的地までの道を探すことである。この能力は自分の居場所を位置づけ、自分の存在「私はここにいる」ことを実感し、未知の世界へ飛び込むことの不安を無くしてくれる。GPS が発達した現代、この能力が失われつつある。

3. 認知地図

場所の記憶から脳内に描かれる地図を認知地図という。空間の認知において場所の感覚には境界が、方向感覚にはランドマークが必要である。脳内地図を座標平面に例えると、境界は「座標線」であり、ランドマークは「座標点」として見なされる。境界のみでは方向を特定することができず、単に記憶されたランドマークだけでは座標点として明確に位置づけることができない。座標点であるランドマークが、境界という座標線によって整理されることで、脳内地図が描かれる。

4. 子供と大人の空間認識

子供の空間認識は近視眼的と言える。目の前の一つ一つのことが新鮮で興味深く、道の記憶は風景として鮮明に残る。しかし、記憶の中の地図と現実とは大きさや距離に大きな差がある。大人の空間把握は俯瞰的であると言える。今までの経験から予測したり、GPS アプリを使うため俯瞰的に空間を捉える。そのため歩くことは目的地に向かうための作業のようになってしまったように感じる。幼少期の近視眼的視点で探索していた頃の方が、道をただ歩くだけでも多くのたのしみがあり、道での発見が思い出のランドマークとして記憶に残っている。しかし、大人の視点も俯瞰的に空間を捉え、正確な認知地図を描くには必要不可欠である。子供の近視眼的視点と大人の俯瞰的視点はどちらの視点も認知地図を作る上で必要なことだと言える。



図1 永遠に続くように見えた広場



図2 通園路の大きな塀

5. 再開発後の都市と昔の道が残る街

再開発や区画整理後の都市は街路が直線的で直角に交わり、同じ景観が続く。街の構造を俯瞰しやすく座標線が引きやすいが似たような景色や道路の形状が続くため、道の記憶が残らず歩く楽しみには欠ける。

一方、昔の道が残る街は予測不能な道の形状や高低差、袋小路が特徴で、ランドマークが多く記憶に残りやすい。しかし、脳内地図を描く上では座標線がはっきりせず街の構造を俯瞰できないため地図が描きにくい側面もある。

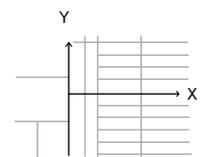


図3 東日暮里の街路



図4 西日暮里の街路

6. 設計提案

「成長と共に変化する空間の捉え方」を建物の中で再現する。建物に入った時は、子どもの近視眼的視点で建物を探索する。身体的な空間体験を通して徐々に大人の俯瞰的視点に変化していく。自分だけの地図を脳内に描き、自己の存在を確立できるような建築を目指す。

6-1 対象敷地

設計敷地は、日暮里駅から東口徒歩 15 分、日暮里繊維街を進んだ先にある東日暮里 4 丁目の閑静な住宅街に位置する。1925 年の日暮里大火の焼消範囲に位置し、古くから存在する街路をほとんど引用することなく区画整理によって全く新しい道路が整備された地域である。



図5 昔と現在の街路

6-2 プログラム

地域に開かれた服飾専門学校を提案する。昔の街路と現在の路地を引用し敷地内に路地をつくる。路地に面した低層階部分には店舗や食堂を設け、パブリックスペースとして街に開く。上階には教室など学校の機能を配置する。小さな街のようなこの施設には、地域の人々、専門学校の生徒、繊維街を訪れた人々それぞれの認知地図が編み込まれていく。

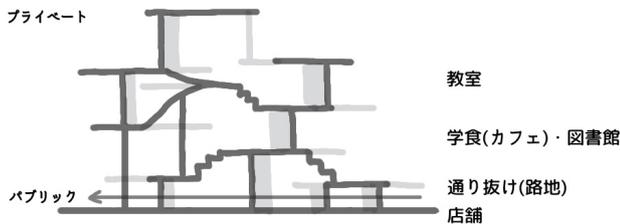


図6 断面計画

6-3 街路の引用

古い道が残る街と区画整理後の街の両方の特徴を取り入れ、建物内に直線的で等間隔の壁と予測できない曲線の壁を混在させる。

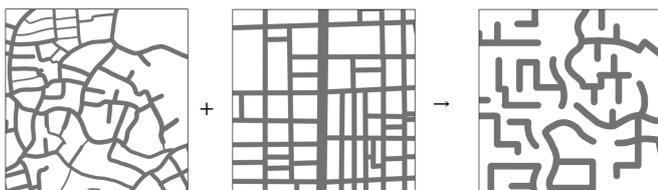


図7 直線等間隔の壁と曲線の壁

6-4 身体的ランドマーク

本設計におけるランドマークは、歩く中で道に意識が向いた瞬間を指し、これを「身体的ランドマーク」と定義する。無意識的だった道にふとした瞬間意識が向くことで、その場所が脳内地図の中で座標点となる。

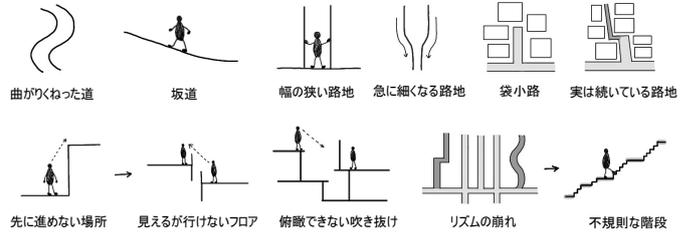


図8 身体的ランドマークの例

6-1 3つの壁

内部空間の壁は、「予測通りの壁」と「裏切る壁」の2つから構成される。予測通りの壁は座標平面において座標線のような役割を果たし、利用者の予測する動線に沿って配置される。一方裏切る壁は利用者の予測しないところに現れる壁である。予測の裏切りが身体的なランドマークとして機能し、意識が壁や通路に向くことで、脳内地図における座標点として記憶される。

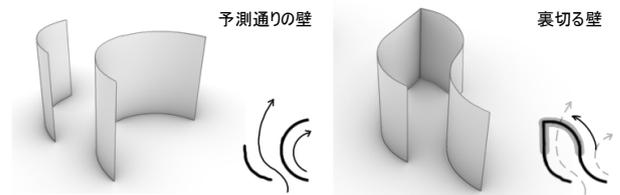


図9 予測通りの壁と裏切る壁

裏切る壁と予測通りの壁の中には、複数のフロアで同じ形状を持つ「共通する壁」が存在する。1階では壁だったものが上の階では家具に変化するなど、構造、壁、境界、家具などの役割を兼ね備える。異なるフロア間の地図を結びつけ、垂直方向の基点として役立つ。

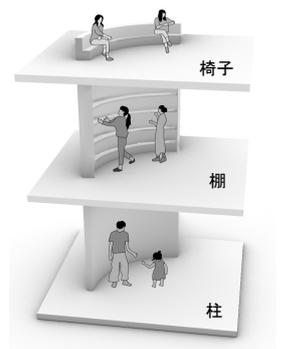


図10 共通の壁

* 主要参考文献

- ・マイケル・ボンド 著、竹内和代 訳、『失われゆく我々の内なる地図』白揚社、2022
- ・理化学研究所 脳神経科学研究センター「脳と時空間のつながり vol.3」(閲覧日 2023.06.19) <https://cbs.riken.jp/public/tsunagaru/fujisawa/03/>
- ・紙野桂人 著、『人のうごきと街のデザイン』彰国社、1980